

拾遺愚草、

下、

部類歌注釈

春

2026

2037

小

田

剛

本稿は、拾遺愚草、下の部類歌の注釈である。底本は定家自筆本（『冷泉家時雨亭叢書』）に拠り、歌番号は、『藤原定家全歌集』（冷泉為臣編）に従った。新編国家大観③は、「上」の末に藤川百首（1501～1600）を入れているために（ほぼ）百番ずつずれている。なお注釈中の「全歌集」は、『歌注藤原定家全歌集』のことである。

略称は以下の如くである。

『新古今歌人の研究』久保田淳、昭和48（1973）年…久保田・研究

『藤原定家研究（増補版）』安田章生、昭和50（1975）年…安田

『定家の歌一首』赤羽淑、昭和51（1976）年…赤羽・一首

『藤原定家（日本詩人選11）』安東次男、昭和52（1977）年…安東

『拾遺愚草古注（上）』昭和58（1983）年、同61（1986）年、

その中の「拾遺愚草抄出聞書（C・類注）」、「拾遺愚草不審」（上）、「拾遺愚草抄出聞書（D・類注）」、「拾遺愚

草摘抄」（以上〔中〕）、なお未刊国文古註釈大系7に、「拾遺愚草抄出聞書（B・類注）」が収められている。順に〔抄出聞書（C）〕〔不審〕〔D〕〔摘抄〕〔抄出聞書（上・B）〕と略

『藤原定家の歌風』赤羽淑、昭和60（1985）年…赤羽
『藤原定家研究』佐藤恒雄、平成13（2001）年…佐藤・研究
「新宮撰歌合（建仁元年三月）全注解稿（一）（五）」（『大阪工業大学紀要（人文社会編）』五三～五六巻、二〇一〇号、二〇〇八～二〇一一年）奥野陽子…奥野注

拾遺愚草下 部類歌

春

建久五年夏左大将家哥合、題名所

春二首之中、志賀浦

2026
(2126)

こほりとくはるのはつかぜたちぬらし／かすみにか

へるしがのうらなみ

〔訳〕氷が解ける春の初風が立つたらしい、霞によつて（岸の近くに）返ってくる志賀の浦波であるよ。

〔語注〕○春 下・部類歌の春歌は定家69首、他人の歌2首。○建久五年¹¹⁹⁴年、定家33歳。○志賀浦（歌題）

③132壬二709、③112堀河137（「しがのうらなみ」）、③133拾遺愚草1209（内裏百首）、1947（最勝四天王院御障子歌）——『歌題索引』による、以下同じ——。○こほりとくはる ⑤

5寛平御時中宮歌合5「氷とくはるたちくらしみよしののよしののたきのこゑまさるなり」（春）。○はつかぜ

八代集では、「秋の初風」のみの用例で、十四例。○た

ちぬらし ①1古今³⁶¹「千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし」。○しがのうらなみ 八代集七例、うち後拾遺二例、

初出は同419（後述）、千載五例。○うらなみ 上記も含めて八代集十二例、初出は古今⁴⁸⁹。

▽三句切。立春で春の初風が立ち、氷がとけて、志賀の浦波は立春を告げる霞の中で（解氷によつて）岸近くに帰ってくる歌って、下、部類歌、春を開始する。〔類歌〕が多い。

全歌集「霞が立つとともに、志賀の浦では」、〔参考〕・

①4後拾遺419「さよふくるままにみぎはやこほらんとは

ざかりゆくしがのうらなみ」（冬、快寛法師）、「快寛の歌とは反対の状況を歌った所が狙い。良経家名所題歌合（散逸）での詠。」

〔類歌〕③131拾玉⁴⁰⁵⁵「しがのうらの浪よりかすむ明ぼのに山吹きおろす春の初風」（水郷春望）……²⁰²⁶に似る

③132壬二¹⁶⁹²「氷とく春の山がぜ吹きぬらしいはねをとむる、淹のなるこゑ」（老若歌合五十首、春。⑤184老若五十

首歌合17）……全体の調子が似る（特に上句）
③132同²⁰⁴⁷「春くれば汀の氷うちとけて霞ぞとづるしがのうらなみ」（下、春「…志賀浦春」。②16夫木⁵³⁹）……²⁰²⁶に似る

③132同²¹²⁴「あづさ弓いそべの浪をたちすて霞にかへる春の雁がね」（下、春「霞中帰雁」）

④15明日香井195「こほりとくおきつはる風ふきぬらしみぎはにかへるしがのうら浪」（千五百番歌合百首、春。

⑤197千五百番歌合54）……²⁰²⁶に酷似
④15同¹³⁰⁰「そらはなほゆきげながらのやまかぜにはるとかすめるしがのうら波」（春「湖上立春」）

④39延文百首²⁰⁰²「おきべより春たちくらしみるままに霞ぞよする志賀のうら波」（春「霞」実俊）

④40永享百首16「はるといへば釣するあまの袖もまた霞に

かへる志賀の浦風」(春「霞」公冬)……2026に似る

④43為尹千首13「氷とくなみこそあらめ早せ川はやくも春の立ちにけるかな」(春「早春河」)

建仁元年正月七日、院に年始哥講／ぜられ侍し日。

初春祝

2027 春ごとのかものはいろのこまなれど／けふをぞひかむちよのためしに

「訳」春毎の鴨の羽色の馬ではあるが、今日ぞひこう、千代の例として。

〔語注〕○建仁元年 1201年、定家40歳。○初春祝(題)

他、③月清1407のみ。○春ごとの ⑤197千五百番歌合96

「はるごとの子日のまつのちよはみな我が君が代のためしなりけり」(春一、釈阿)。○かものは、はいろ 共に

八代集にない。②4古今六帖50「水鳥のかものはいろの

あをき馬をけふくる人はかぎりなしふ」(第一「あを

むま」やかもち。万葉45184494。②4同1467「水鳥のかものは

いろのはるやまの……」(さかの女郎イ。万葉14551451。③132

壬二2072「なには江のかものは色に立ちかへて……」。④32正

治後度百首889「もしきやかものは色の青きむまをいつし

かみよとひきぞつらぬる」(さふ「くじ」宮内卿)。○

こまなれ ①1古今1045「いとほるるわが身ははるのこまなれや……」。○ちよのためし 八代集三例。○ちよのためしに ①3拾遺23「千世のためしになにをひかまし」

(ただみね)。③105六条修理大夫182「君が代をねのびのまつとけふよりは千代のためしにひかむとぞ思ふ」(百首和

歌、春「子日」。③129長秋詠藻614「春日野のけふの子日の松をこそ千世のためしに引くべかりけれ」(正月「子日、

小松原」。⑤258文治六年女御入内和歌16)。

▽四句切、下句倒置。毎年の鴨の羽色の馬だが、千代の例として今日曳こうと歌う祝賀詠。

B 373「初春祝鴨のは色とは白馬の事也駒なれとゝは年とのことなれとも今日をそ千世のためしには

ひくへきの心也」C 462「水鳥の……馬は陽の獣なり。正月七日、禁中にて御覧する也。白馬の節会といへり。白馬

とかきて、あを馬とよむ也。年ごとの事なれど、けふを千世のためしにひかんと、祝言也」・D 98 不審186「……か

も……如何。／※白馬ヲバアヲ馬トイヘリ。正月七日ノ歌ナレバ、白馬節会ノ心也。」

全歌集「参考」・万葉45184494(②4古50)(私注―前述(語注))、以下二〇二九まで三首は、後鳥羽院御所年始歌

会の詠。：正月七日、天皇が左右馬寮の引く白馬（うまお）

を見る白馬節会を歌う。白馬（青馬）は実際は灰色の馬かという。青は春の色、馬は陽の獣なので、青陽の春にちなむ白馬を見て年中の邪氣を避けようとした。」安田143、

147頁『万葉集』の影響を受けていると思われる作」・（参考歌）・万葉4518 4494 ②4古50

〔参考〕③119教長21「はるごとにさかゆるのへのこまつばらちよのためしにむべもひきけり」（春）

〔類歌〕④31正治初度百首510「あさみどり春のしるしにひく物はかものは色の駒にぞ有りける」（春、通観）

松間鷺

2028 まつの葉もはるはわけとやゆふづく日／さすやをかべにきゐるうぐひす

〔訳〕松の葉も春は分けよということでか、夕付日が差すよ、岡辺に来て止まっている鶯であるよ。

〔語注〕○松間鷺（題） 他は③130月清1012のみ。○まつの葉 八代集七例。○初句 2046後出。○わけ 動詞、

命令形。○ゆふづく日 八代集二例、初出は金葉427。「言ふ（ゆふ）」掛詞か。○さすやをかべ ③131拾玉476「あさづくひさすやをかべの草のはにすがれる露をよそにやは

みる」（日吉百首和歌、無常五首）。○をかべ 八代集

四例。○きゐる 八代集三例。○末句 2033後出。①

古今5「梅がえにきゐるうぐひすはるかけて…」（よみ人しらず）。

〔本歌〕①古今490「ゆふづく夜さすやをかべの松のはのいつともわかぬこひもするかな」（恋一、読人しらず。

「本歌」（全歌集）。②4古今六帖355。③4猿丸20。

⑤292綺語抄16。⑤307近代秀歌73）

▽詠歌大概で言う如く、恋の本歌で四季（春）歌を詠む。

本歌をふまえて、いつとも分かれ（恋をしている）という

松の葉も、春はそれによつて区別せよということでか、夕

月の暮方の日がさしている岡辺に鶯が来ていると歌う。本

歌の古今歌ゆえか、〔類歌〕が多い。

〔参考〕②4古今六帖279「ゆふづくひさすやをかべにつくるやのかたちをよしみしかぞよりくる」（第一「てる

ひ」。②4同2159。⑤292綺語抄13）

〔類歌〕①11統古今573 576「ゆふづくひさすやをかべのこが

らしにまつをのこしてちるもみちかな」（冬「：、夕

落葉と…」師継）

①15統千載1641 1642「朝日影さすやをかべの松の雪もきえあへ

ぬまに春は来にけり」(雑上、読人しらす)

- ③ 131 拾玉 4999 「みかさやまさすやすそののゆふづくひはるの
わらびををりえてぞくる」

- ③ 132 壬二 2180 「あさづく日さすや岡べと名のみして霞める松
に春雨ぞふる」(下、春「朝春雨」)

- ④ 15 明日香井 159 「いろかへぬいろこそかはれゆふづくひさ
すやをかべのまつむらだち」(後鳥羽院第二度百首、
雑「暮」)。④ 32 正治後度百首 266

- ④ 11 隆信 147 「秋の色をいつしかみするゆふづくよさすやを
かべの松風のこゑ」(秋上)。⑤ 197 千五百番歌合 1098

- ④ 38 文保百首 2530 「涼しさはいつともわかず夕附日さすや岡
べの松のしたかせ」(夏、為定)

- ⑤ 197 千五百番歌合 1958 「さびしさをいかにとはましゆふづく
ひさすやをかべの松のゆきををれ」(冬三、公経)

- ⑤ 319 和歌口伝 145 「きえぬまは春ともわかず夕づく日さすや
をかべの松のしら雪」(隆博)……2028 に近い

- ⑤ 319 同 146 「春のたつあとをわかずゆふづく日さすや岡べ
にのこる白雪」(御製)

朝若菜

霞たちこのめはるさめきのふまで／ふるのゝわかなけ

さはつみてむ。

「訳」霞が立ち春が来て、木の芽が張り、春雨は昨日まで
降って、布留野の若菜を今朝は必ず摘むことにしよう。

〔語注〕○朝若菜(題) ③ 130 月清 1013、③ 131 拾玉 3779、③ 132
壬二 606、③ 133 拾遺愚草 1106 (内大臣家百首)。○霞たち
八代集十例。○このめ 八代集八例。○第二句 2060 後

出。○はる 「春・張る」掛詞。○はるさめ ④ 26 堀
河百首、春に、題として、161、176 (16 首) ある。○きの
ふまで ① 2 後撰 1405、④ 1406 「昨日までちよとぎりし君をわが
……」(右大臣)。○ふるの 八代集四例。「ふる」掛詞(布

留、降る・「春雨」の縁語)(全歌集)。○て 強意。
〔本歌〕① 1 古今 9 「霞たちこのめはるの雪ふれば花な
きさとも花ぞちりける」(春上「ゆきのふりけるをよ
める」きのつらゆき。「本歌」)(全歌集)。② 4 古今 六

帖 19)

▽本歌をふまえて、雪が降って花なき里も花が散っていた
ような布留野にも、春が来て霞が立ち、木芽が張り、春雨
が昨日まで降っていた布留野の若菜を今朝は摘もうと歌
う。① 13 新後撰 29、春上「朝若菜を」前中納言定家、末句
「……てん」。

〔参考〕③ 125 山家 20 「春雨のふるののわかなおひぬらしぬ

れぬれつまんかたみたぬきれ」(春「雨中若菜」)③

126 西行法師 19)

〔類歌〕③ 130 月清 806 「のちやまもおなじみどりにそめてけ

りかすみよりふるこのめはるさめ」(千五百番歌合、

春。① 15 続千載 63。⑤ 197 千五百番歌合 183)

③ 132 壬二 2067 「昨日まで故郷ちかく三芳野の山もはるかに霞

むはるかな」(下、春「霞歌」)① 13 新後撰 4。④

34 洞院撰政家百首解 201)

④ 18 後鳥羽院 314 「霞みたちこのめはる雨ふるさとの吉野の

花もいまやさくらむ」(外宮御百首、春。① 10 続古今

67。② 15 万代 193)

④ 18 同 404 「しろたへの衣はる雨かきくもりふるののわかな

いまやつむらん」(千五百番御歌合、春。⑤ 197 千五百

番歌合 91)

⑤ 197 千五百番歌合 207 「もえいつるこのめはるさめけふもな

ほふるのの若なまだはつかなり」(春二、具親)

承久元年七月内裏歌合十首之内、野徑霞

2030 かがすか野、かすみの衣山かぜに／しのぶもちずりみだ

れてぞゆく

〔訳〕春日野の霞の衣は山風に(吹かれて)、信夫文字摺

りとして乱れて行くことよ。

〔語注〕○承久元年 1219 年、定家 58 歳。○野徑霞(題)

他は③ 132 壬二 2091、⑦ 46 出観(寛性) 20 のみ。○かすが

野、① 1 古今 18 「かすがののどぶひののりいでて見よ

」(よみ人しらず)。④ 33 建保名所百首 45 「梅の花それ

かとばかり春日のの霞を分けて春風ぞふく」(春「春日

野」)。○かすみの衣 八代集二例・古今 23 (本歌)、千

載 9。「漢語「霞衣」に当る。」(新大系・古今 23)。2058 後

出。○しのぶもちずり 八代集五例、古今 724 (本歌)の

他すべて千載集。○ゆく 時空のうち時か。

〔本歌〕① 1 古今 23 「はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ

山風にこそみだるべらなれ」(春上、在原行平。「本

歌」(全歌集)。② 3 新撰和歌 73。② 4 古今 607)

① 1 古今 724 「みちのくのしのぶもちずりたれゆゑにみだれ

むと思ふ我ならなくに」(恋四、河原左大臣。「本歌」

(全歌集)。⑤ 415 伊勢物語 2)

▽第一、二句かすの頭韻。二つの本歌によって、春日野の、

春の着ている緯の薄い霞の衣は、山風によって、陸奥の信

夫文字摺のように、あなたのせいで我が恋心が乱れる如く

乱れて行くと歌う。① 19 新拾遺 31、春上「承久元年内裏十

首歌合に、野徑霞」前中納言定家。② 16 夫木 494、春二、霞

「承久元年十首歌、野径霞」同（「前中納言定家卿」。⑤
218 内裏百番歌合（承久元年）3、承久元年七月廿七日、野
径霞、二番、左勝、定家卿、「左、かすがの霞のころも、
すがたことばえんに、殊によろしくきこゆ、以左為勝」。
⑥ 11 雲葉 34、春上「承久元年内裏十首歌合に、野径霞」前
中納言定家。

六家抄 274「ゆう／＼としたる霞が風にみだれたる心也。右、
しのぶのみだれと春のきるかすみの衣と二首取てよめり。」
全歌集「参考」・⑤ 415 伊勢物語「かすが野の若紫のすり
衣いのぶのみだれ限り知られず」（第一段、男）

「参考」② 4 古今六帖 616「鶯のはかぜをさむみ春日野
の霞の衣いまやたつらん」（第一「かすみ」。① 10
続後撰 17）

③ 106 散木 1352「宮木野のしづくにかへるかり衣忍ぶもち
ずりみだれしぬらし」（雑上）

「類歌」② 16 夫木 4119「かすがののいのぶもぢずりあき
萩の花のみだれもかぎりしられず」（秋二、萩、為
家）

① 34 洞院撰政家百首 906「道の辺の山はしのぶのすり衣
かさなる雪もみだれてぞ行く」（雪、四条坊門）

2031 正治二年九月院初度野合（若草十首）
うちなびきはるのみそらもみどりにて／かぜにしらる
、野邊のわかくさ

「訳」（うち）靡いて春の空も緑であつて、風によつて存
在が知られる 野辺の若草であるよ。

「語注」○正治二年 1200 年、定家 39 歳。○若草（題）

歌合「七五 天延三年三月十日 一条中納言為光歌合」、
「一六一」（天喜四年閏三月）六条斎院祿子内親王歌合」

・⑤ 78 六条斎院歌合 11、12、⑤ 175 六百番歌合・春（37、48）。

○うちなびき 八代集八例。2040、2041 後出。「霞が」か、
また「若草が」靡いているのか。「春」の枕詞。（全歌
集）。① 1 古今 230「をみなへし秋のの風にうちなびき心ひ
とつをたれによすらむ」（秋上、左のおほいまうちぎみ）。

④ 34 洞院撰政家百首 259「岡のべのつばなも白く打ちなびき
風さへ春をおくりがほなる」（春、暮春、行能）。○は
るのみそら 八代集一例・① 7 千載 1229、1226「はるのみそら
もみどりなるらん」（丹後）。他「春の空」八代集二例、
初出は金葉 421。「春のみ空」か。○かぜにしらる ① 3
拾遺 66「……ちりのこれりと風にしらるな」（小式部婦）。

○る、自発か可能か。○わかくさ 八代集六例。

▽摩いていて、春の空も若草同様緑であつて、野辺の若草は風によつてありかがほのかに知られると歌う。風に知られるのは、(草の)生長の度合か。⑤181仙洞十人歌合20、正治二年九月十二日、「若草」、十番、右、定家朝臣、「右もからねど、左の、むらむら…」・「九番では女房(後鳥羽院)と合されて負けた。」(全歌集)

C 463 「打なびき」とは、世界の春に乗じたる事なり。もえいでし草も、やうく風にしらるゝ程に、生のびたる体也。君子徳風□小人徳草也。草に風を加即のべふすと云事よりいへり。「み空」は、たゞそらの事までなり。」「一

春の気運にうちまかせて。／＼「君子之…必偃(論語

・顔淵一二)」。・D 99

〔類歌〕①18新千載37「冬がれのしののをすすき打ちなびきわかなつむ野に春風ぞ吹く」(春上、為家)

③134拾遺愚草員外234「えのみなみわか葉の草もみどりにて春のかけなる神無月かな」(詠四十七首和歌、冬。②16夫木6528)

④35宝治百首399「おしなべておなじ緑の春の色に空もひとつの野べの若草」(春「若草」但馬)

④38文保百首2305「春雨は空のみどりの雫とやふれば色

こきのべのわかくさ」(春、為実)

⑤230百首歌合(建長八年) 361「あをやぎのは山の霞うちなびき空もみどりに春風ぞ吹く」(伊嗣)

⑤244南朝五百番歌合274「うちなびき草のしげみを吹く風に露もたまらぬ夕立の空」(夏四、具氏) ……こと

ば

雪間若菜といふことを

2032 いつしかと、ぶひのわかなうちむれて／つめどもいま

だゆきもけなくに

〔訳〕早くも飛火(野)の若菜に(うち)群れて、摘むけれどもまだ雪も消えていないのに…。

〔語注〕○雪間若菜(題) この歌のみ。 ○いつしかと

①ー古今183「…いつしかとのみまわたるべき」(みぶのただみね)。 ○、ぶひ 地名・歌枕。普通名詞共に八

代集六例。「問ふ」を掛けるか。」(全歌集)。 ○うちむ

れ 八代集七例。 ○うちむれて ①ー古今126「おもふど

ち春の山辺にうちむれて…」(そせい)。 ○いまだ こ

れのみ八代集十三例。 ○ゆきもけ ①2後撰1206「しら

がしの雪もきえにし葦引の…」(敦忠)。 ○なく ク語

法。 ○けなくに 「消えないことだ。」(全歌集)。

「本歌」①古今18「かすがののどぶひののもりいでて見よ今いかありてわかなつみてむ」(春上、よみ人しらず。「本歌」(全歌集))

▽本歌をふまえて、早くも春日野の飛火野の、出て見て、もうあと何日したら若菜が摘めるのか聞いた野守のいる野の若菜に群がつて摘もうとするが、まだ雪も消えていないのに……と詠ず。同じ定家に、共に円熟期の、③133拾遺愚草903「春の色をとぶひの野守尋ねれば二葉の若菜雪もきえあへず」(正治……、春。④31正治初度百首¹³⁰⁶)、③133同1730「若なつむ宮こののべにうちむれて花かとぞみる峰の白雪」(仁和寺宮五十首、(春)。④41御室五十首⁵⁰⁰)がある。

「類歌」①14玉葉7「いつしかもかすみにけらしみよしのやまだふる年の雪もけなくに」(春上「早春の心を」

前関白太政大臣)

③132壬二¹²⁴³「うちむれてわかな摘むの花がたみ木のめも春の雪ぞたまらぬ」(為家卿家百首、春。①11続古今

22)

④22草庵24「打ちむれてわかなつみにとこしものをまだ雪ふかし萩のやけ原」(春「雪中若菜」)

④39延文百首305「いつしかとつみにきつれど野べはまだ雪ますくなきわかななりけり」(公隆)

①39同905「たれしかもゆきてつむらんかすがののどぶひのわかな雪もけなくに」(春「若菜」賢俊)

老後閑居つれづれのあまり。とぶらひ／まうできた人／の哥よみ侍しに。初聞驚

2033 あらたまのとしのはつこゑうちはぶき／あさけのそらにきゐるうぐひす

「詠」(新)年の初声を上げ、羽ばたきをし、朝明けの空にやつてきた鶯であることよ。

「語注」○老後閑居「あるいは、承久の乱後、安貞元年(一二二七)十月二十二日、民部卿を辞した後にしばしば行った月次歌会での詠か。」(全歌集)。○初聞驚(題)

①5金葉二13「はじめてうぐひすをきくと……」、⑥1金葉初16「(同)」、②10続詞花15「はじめて鶯をきく」、

③119教長44「(始聞驚と……)」。○あらたまの「年」

の枕詞。○あらたまのとし①古今339「あらたまの年のをはりになること……」(在原もとかた)。①2後撰1303

1304「まつ人はきぬときけどもあらたまのとしのみこゆるあふさかのせき」(雑四「しはす……」よみ人しらず)。①5

金葉二7「あらたまのとしのはじめにふりしければはづきとこそいふべかりけれ」(春「む月の……」顯季。①5金葉

三七) ④15明日香井735「あらたまのとしのをながくうち
はへてたえずもなびく春のあをやぎ」(院百首、春)。④
41御室五十首549「あら玉のとしもかはらぬ故郷の雪の内に
も春は来にけり」(春、家隆)。○はつこゑ 八代集九
例。○うちはぶき 八代集二例。①古今137「さ月まつ
山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふるゝゑ」(夏、よ
み人しらず。「参考」(全歌集))。④21兼好252「きくから
に春ぞのどけきうちはぶきみやこにいつる鶯のこゑ」
(「…、初聞鶯と…」)。○あさけ 八代集五例。○あ
さけのそらに ⑤244南朝五百番歌合501「水ぐきの岡のやか
たもうち時雨れあさけの空に冬はきにけり」(冬一、女房)。
○きゐる 八代集三例・すべて三代集、初出は古今5(後
述)。○きゐるうぐひす 2028前出。①古今5「梅がえ
にきゐるうぐひすはるかけてなけどもいまだ雪はふりつ
つ」(春上、よみ人しらず。「参考」(全歌集))。⑤50四季
恋三首歌合4「梅枝にきゐる鶯年毎に花の匂ひをあかぬ声
する」(春)。
▽新年、初声を響かせ、羽ばたきをして、待望の鶯が朝明
の空にやってきたと歎ぶ。同じ定家に、共に円熟期の、初
めと終りが同一な③133拾遺愚草902「あら玉の年のおくるを
まちけらしけふ谷の戸をいつる鶯」(正治…、春。④31正

治初度百首1305)、腰句が同じ③133同1004「山里は谷の鶯うち
はぶき雪よりいつるこぞのふるゝゑ」(千五百番百首、春。
①15続千載11。⑤197千五百番歌合104)がある。②16夫木313、
春二、鶯「家集、初聞鶯」同(「前中納言定家卿」)。
六家抄275「鶯のきゐるきなくなど有は来所はいづことなけ
れどもよみならはしたる也。うちはぶきは羽をひろぐる
也。」

霞中梅

2034 とひこかしたちえはむめの見えずとも／にほひをこめ
てたつかすみかは

〔歌〕 やつて来よ(君)、立枝の梅は見えなくても、匂い
を込めて立つ霞であらうか、イヤそうではない。

〔語注〕 ○霞中梅(題) この歌のみ。 ○とひこ 八代
集五例、初出は千載413、あとすべて新古今。西行の①8新
古今51「どめこかし梅さかりなる我がやどを…」もある。

○たちえ 八代集七例。式子374・一例(⑤183三百六十番
歌合50)。○見えずとも ①古今91「花の色はかすみ
にこめて見せずともかをだにぬすめ春の山かせ」(春下、
よしみねのむねさだ。⑤5寛平御時中宮歌合6)。①古今
335「花の色は雪にまじりて見えずとも…」(小野たかむ

ら)。②3新撰和歌136「梅のはな雪にまじりてみえずとも
かをだににほへ人のしるべく」(第二)。③116林葉98「杉
のはは霞にこめて見えずとも折るしるしいなりかくれ
し」(春「稻荷詣問」)。○たつかすみ ②4古今六帖626

「たまきはるわがやどのうへにたつかすみ」。

「本歌」①3拾遺15「わがやどの梅のたちえや見えつらん

思ひの外に君がきませる」(春、平兼盛。「本歌」(全
歌集))

▽本歌をふまえて、君よ、思ひの外に訪れて来よ、我が宿
の立枝は梅が見えても見えなくても、匂いを封じ込めて立
つ霞であろうか、イヤそうではないのだから…と歌う。

湖邊梅花

2035 けふぞとふしがつのあまのすむさとを／うぐひすさそ
ふ花のしるべに

〔訳〕今日訪れることよ、志賀津の海人が住む里を、鶯を
いざなう花のしるべとして。

〔語注〕○湖邊梅花(題) この歌のみ。○しがつ 八
代集にない。万葉218「楽浪の志賀津の子らが罷り道の…」。

③116林葉504「しがつの浦に雪ぞ降りしく」。③117頼政237
「しがつの浦は山のはちかし」。③132壬二2614「氷りゆく

しがつの汀あらためて…」。⑤163三井寺新羅社歌合40「夜
もすがらししがつの浦による玉や…」(智選)。⑤163同46「し
がつの沖に雪ぞきえせぬ」(智経)。○すむさと ①

3拾遺387「あかずしてわかれし人のすむさととは…」(よみ
人しらず)。○うぐひすさそふ ③13拾玉2600「花と竹と

つづく梢の山里に鶯さそふ春のやまかせ」(春)。③132壬
二2198「古郷は梅もさくらも散りはてて鶯さそふ款冬の花」

(春)。④34洞院摂政家百首解289「ちりはつる花だにつら
き古郷にうぐひすさそふ春もいぬめり」(暮春)(家隆)。

〔本歌〕①1古今13「花のかを風のた

よりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」(春

上、紀とものり。「本歌」(全歌集)。②2新撰万葉

11。②3新撰和歌15。②4古今六帖30、同385、同4394。

②8新撰朗詠64。③11友則2。⑤4寛平御時后宮歌

合1。⑤292綺語抄473)

▽初句切、倒置。本歌をもどに、梅の香を風の便りとして
伴い、鶯を誘う梅の花のしるべとして放つて、志賀津の海

人の住む里を今日訪れると歌う。②16夫木735、春三、梅「家
集、湖邊梅を」同(「前中納言定家卿」)。

全歌集「参考」・万葉12571253「楽浪の志賀津の海人は我れな

しに潜きはなせそ波立たずとも」(巻第七)

旅宿早春

2036 枕として草のはつかにむすべども／ゆめもみじかきは
るのうたゝね

〔訳〕 枕として草はわずかで、わずかに(草枕を)結ぶの
だが、夢もまた短い春の転寝であることよ。

〔語注〕○旅宿早春(題) この歌のみ。○草のはつか
に ①古今 478 「かすがののゆきまをわけておひいでくる
草のはつかに見えしきみはも」(恋一、みぶのただみね。

「参考」(全歌集)。○はつかに 八代集十三例。兩義
(上下にかかる)。○むすべども ①拾遺 1004 「…むす

べども猶あわに見ゆらん」(貫之)。③119教長 694 「あふこ
とはくさのまぐらにむすべどもつゆもあだにはおもはざら
なむ」(恋「旅宿遇恋」)。⑤72関白殿蔵人所歌合 25 「草ま

ぐらつゆうちらはらひむすべどもいもこひしさにぬれまさる
かな」。○みじかき これのみ八代集十例、他「短夜」

八代集三例。○はるのうたゝね ③133拾遺愚草 628 「…昔
にやどかる春のうたたね」(花月百首)。④一式子 216 「…

しづこころなき春のうたたね」(①11続古今 147。④31正治
初度百首 218)。⑤244南朝五百番歌合 48 「…手まくら句ふ春

のうたたね」(光資)。

〔本歌〕⑤415伊勢物語 151 「枕とて草ひき結ぶこともせじ秋
の夜とだにたのまれなくに」(第八十三段、馬頭。「本

歌」(全歌集)。①9新勅撰 538。②4古今六帖 2424。同

3242。③6業平 31)

▽本歌の伊勢物語世界をふまえ、枕として、引き結ぶこと
はすまいといった草は、早春とてまだわずかで、わずかに
草枕を結ぶが、春の転寝は、夢も草同様、秋夜のように頼
みと出来なくて短いと歌う。全歌集は「…、夜は明けてし
まった。」と添える。

六家抄 276 「右、まくらとて草引結ぶにてよめる。本哥の心
秋の夜ならば長きほどにたのみもせんが、春の夜は中／
みじかきほどに枕もせぬと也。」

〔類歌〕①10続後撰 1053 「まぐらとてむすぶばかりぞあや

め草なぬにわけぬる夏の夜なれば」(維上、藤原孝継)
④15明日香井 1565 「たれとかはかりのならひのまぐらとてく

さひきむすぶのべにかもねん」

⑤325和歌用意条々 20 「枕とてあまたはねずなあやめ草かり
にぞ結ぶただ一夜のみ」(九条二品(行家))

三宮より十五首哥めされし。春哥中

2037 あすかゞはとをきむめがえにほふ夜は／いたづらにやは春風のふく

〔訳〕飛鳥川、(付近の) 遠い梅の枝に香がする夜は、むなしく春風が吹くのであろうか、イヤそうではない、梅の香を川辺の里に運んでくる。

〔語注〕○三宮 高倉天皇の第三皇子惟明親王(1179-1221)。

式子との歌の贈答で知られる(①8新古今137、138、同1543、1546、1544。詳しくは『式子内親王全歌注釈』309と310、323と324)。

○あすかゞは ①ー古今284「たつた河もみちば流る神なびの…」(又は、あすかがは…)や、有名な①ー同933「世中はなにかつねなるあすかがは…」(説人しらず)。○

にほふ夜は ③134拾遺愚草員外75「にほふ夜はさらに物こそかなしけれ梅さく春と人やたのめし」。④39延文百首707

「梅がかは闇にもりきて手枕のすきまのかぜも匂ふよはかな」(春「梅」覚著)。○夜は「夜半」ではなからう。

○春風のふく ⑤185通親亭影供歌合6「ちりぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風のふく」(「梅香留袖」有家。①8新古今53。⑤329桐火桶196)。

〔本歌〕万葉51「采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く」(巻第一、志貴皇子、初句②ー万葉51

「採女乃」。「本歌」(全歌集、新大系・百番6)。①

11 続古今 938 946 (田原天皇)

▽万葉歌をふまえて、無常の飛鳥川の周辺の、都のはるか彼方の梅の枝に香りのする夜は、むなしく采女の袖を吹き返す春風が吹くのか、イヤそうではなく梅香を運ぶと歌う。また同じ定家に、③133拾遺愚草1806「たをやめの袖かもみちかあすか風いたづらにふく霧のをちかた」(院五十首「秋」)がある。②16夫木733、春三、梅「六条親王家卅首」同(「前中納言定家卿」)。⑤216定家卿百番自歌合6、右、三宮五十首、無判。

摘抄14「春は千草万木の気皆かうばしきもの也。其中にも梅はことなり。春の夜は何となく心あくがれていねがてなる暁がた、そこもしらぬ梅の匂ひをさそひきたる風によりて、本歌をおもひよれる歌なり。…」

全歌集「この十五首は建暦元年(一一二二)五月―建保二年(一一二四)二月一日の間の詠か。親王・家隆の作が知られる。」「家隆はこの十五首で「なさけある…(私注③132王二3046「情あるこのごろのよの数に入りてうき身のはても人や忍ばん」(雑「三宮十五首会に、雑歌」)と詠んでいるが、これは建暦二年(一一二二)五月五日に昇殿を聴された喜びを籠めるか。一方、定家の本十五首に見ら

れる述懐は、これが建保二年（一二二四）二月十一日の任
参議以前の詠であることを暗示するか。」

〔類歌〕① 9 新勅撰 1036 「むめがかのたがさとわかずには
1038 ふ夜はぬしさだまらぬはるかぜぞふく」（維一、行念）

（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）